異邦民の手記

temso

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異邦民の手記

【Nコード】

N8110A

【作者名】

temso

【あらすじ】

別の世界に紛れ込んだ日本人の少年の話。政府の歴史資料室に放り込まれた彼は、そこで出会った『先生』にいろいろなことを教わる。

歴史

『資料室』。

そうとだけ書かれたプレートが掲げられた重厚なつくりのドアを前に、彼はため息を一つつく。

どこからどう見ても十代半ばくらいの少年。その名を神田琢磨という。神奈川県横浜市出身の十七歳、趣味はギターと漫画とサッカー。五人家族で上に三つ離れた兄と下に一つ離れた妹がいる。

ドアを押し開けて中に入った。埃っぽい空間がすこしかき乱され、ひんやりした空気が頬をなでる。

そこはまあ、図書館のようなところだった。ただっ広い室内に所狭しと本棚が並び、大きなテーブルが合計三つ並んでいた。

実家の近くにある図書館もちょうど、こんな感じの場所だった。相違点を挙げれば、ここには雑誌だのパソコンだの漫画だのといった、彼がまあ面白いと思えるグッズが何一つ置かれていないということ。彼の身長よりも高い本棚には古臭い無骨な本がずらりと並び、色彩はほとんど茶色と白ばかり。どこまでも静かで、試験勉強にはもってこいの空間なのかもしれないが、少なくとも琢磨には縁もゆかりもない場所であるといえる。

テーブルの一角でなにか書き物をしていた人物が顔を上げてこちらを見た。

「ああ、おはよう」

「おはよっす」

軽く手を上げて挨拶を返す。

「今日は遅刻しなかったね」

まるで優しい先生のようなその男はその碧い目に笑顔を浮かべる。ノリス・フォスター。リンダリア北部、ウエアリア出身の三十歳で仕官して今年で満十年を迎える。仕事一徹のくそまじめ男だが、

一言で言えば眉目秀麗な見てくれのせいで周りからもけっこうもてる。それでも独身を貫いているため、一部ではゲイなんじゃないかと噂されていた。

「ふあ……。じゃ、はじめます」

「ああ、待って」

あくびを一つしてメールボックスに向かおうとした琢磨を、ノリスはやっぱりと呼び止めた。

「なんすか？」

「昨日言つたる？今日は朝から授業だよ」

「ええ!？」

ノリスはこの資料室の室長、リンドリア共和国の歴史の編纂も受け持ちでやっている。そして一年前、琢磨と出会ったとき彼には琢磨の教師になるという新しい仕事も与えられた。

ちなみに琢磨の最近の一日はノリスの手伝いに始まり、午後からは退屈極まりない勉強の時間。でも琢磨はこの一年、必死にノリスからいろいろなことを吸収してきた。

そうしなければ、生きていけないと思ったからだ。それまで彼の身に起こったすべての事件は、嫌というほどそれを教えてくれた。

ノリスに促されてしぶしぶ彼の向かいに腰を下ろす琢磨。

「もう君も読み書きはかなり出来るようになった。今日からは歴史なんかの授業もやってくよ」

「はあ……」

褒められはしたがあまり嬉しくない。別に褒められたいから頑張った訳ではないから。

「ま、これまでにそういう話もしてきたけど。まずはこの本、ほら」

ノリスは彼の前に二冊の本を置いた。一冊はリンドリアの言葉で『国史概説』と書かれた本。そしてもう一冊は琢磨の母語 日本語で『辞書』とある、簡素な作りの紙の束を綴じたものだった。

琢磨は国史概説のほうを手にとってページをめくる。今まで読ん

できたほかの本と同様、難解な文字の列がずらずらと目に飛び込んできた。

「うー……」

渋い顔でうなる琢磨。手作りの辞書に手を伸ばす。もう半年以上も前からノリスと二人で作り上げてきたこの辞書は現在進行形で厚みを増している。

「じゃ、今開いてる一ページ目。人類の誕生、の項。いい？」

「はい……。誕生？ちよつと待って」

新しい紙切れを取り出し、ペンを走らせる。単語帳を作っている学生と全く同じノリだが、それは英語でも古語でもない。

じつくりと琢磨が書き終わるのを待って、ノリスは話し出した。

「重要なとこだけ、今日は取り出して読んでくよ。本の読解なんかは明日からやろう。最初は聞くだけ、面白い話だけね」

こういふ先生いたな、とぼんやり思う。そういう先生の『面白い話』というのは、先生にとって面白い話という意味で、要するにしゃべりたいからしゃべるのだ。

しかもノリスにとっては専門でもある歴史の話。学者というのはみんな、得意分野が関わりと目の色を変えてテンションを上げてくる。

「まずは今君が開いてる『人類の誕生』の項。これは前にも話したつけ。じゃ、テストだ」

「ええ？」

唐突な成り行きに戸惑う琢磨。

「では問題。人類はどうやってこの世界に生まれたんでしょうか？」

「えーと……。サルから進化した」

「違います」

ノリスは即答でペケをつけた。

「まったく。話はちゃんと聞いててね？そんなおとぎ話、だれも信じやしないよ。正解は水の神様と火の神様を作った」

この世界はその昔、何もなかったの地平だったという。水も木も何も無い。生き物も。

あるとき、そこに神様が降り立った。神様は大勢でやってきて、この何も無い世界を嘆き、美しい世になるよう様々なものを造った。たとえば地の神様は水の神様と協力して木々を、火の神様は風の神様と協力して太陽を、光の神様は闇の神様と協力して月を、といった具合に。

そして火の神様と水の神様の合作が生き物だ。生物に体温があるのは内に神の与えた命の炎が燃えるため、息を引き取るときその炎も消えて熱を失う。水はその火を維持するため、あらゆる事柄に必要とされる。

さらに、人間には特別に二人の神様から他の生き物よりも特別なものを与えられた。それが『知恵』にあたる。知恵は新たなものを創造する力、魔法を操ることもそれをなくしてはなしえないとされる。

云々。

そんなノリスの講釈を聞きながら、どっちがおとぎ話なのかと思う琢磨だった。

「で、質問は？」

「ないです」

満足げにうなずく先生に、自然とため息が出る。やっぱりこいつも、自分のしゃべりたいようにしゃべり倒すクチの教師だ。

「よし、じゃあまあ、この話はこのへんにして、次いこう。今度は君も興味を盛ってくれと思う」

琢磨は疑わしい目を隠そうともせず、じろりとノリスを見た。

「ほんですか」

「うん。いきなり時代は飛んで、今から百年くらい昔の話だ。これはリンダリアの話じゃなくて、隣のゴーウェ王国の話。あ、いや。そのころはまだゴーウェじゃなかったけど」

「いいっすから。そーいうのは」

「……そう。まあ、いいや。百年前　ゴーウエがアジアって呼ばれてたころ。その王室に珍しい客人が訪れたんだ」

年齢にすれば見たところ三十半ばくらいの、女性だった。金髪碧眼の美しい女性だったという。それだけの人物ならこの世界を探せばいくらでもいるだろうが、それだけではなかった。だからこそ、歴史の話にも顔を出すのだろうか。

彼女は、言葉を話せなかった。それどころかわけのわからない言語を語り、字も読めず、これまたわけのわからない文字を綴った。

治安を乱すものとして、彼女は時のアジアの国家警察に捕まった。泣き叫びながら彼女が叫び続けていた言葉が文献に残っている。「アイ、ウインリトウー。ずっとそれを繰り返してたって話だよ、牢に入れられた彼女に、いろんな人が会いにきた。医者や学者、小説家なんかも面会に来たそうだ」

一ヶ月が経った頃には、彼女はすっかり憔悴して何も話さなくなつたという。そのころには彼女はもう牢を出されて、王宮の外れの小さな小屋に入れられた。

それから三ヶ月が経った。彼女は徐々に元気を出してきて、この国の言葉を覚えようとした。彼女についてた付き人が先生になつて、ちよつとずつ、ちよつとずつ」

そこでノリスは一度言葉を切り、琢磨の反応をうかがってみた。

彼はじつとその話を聞いている。だるそうな様子はなく、ただノリスの目を真つ直ぐに見て。

「で、その人は？」

「……どうなつたと思う？」

「ノリスさん!？」

立ち上がってつばを飛ばしてくる琢磨に、ノリスは苦笑する。

「ごめんごめん、悪気はないよ。ただ、焦らないこと。前にも約束したけど、逸って行動してもいい事は何も無い、そう言つたら？」

「それはそうですけど!」

「気持はわかる。でも、君にはまだ足りないものもたくさんあるんだ。今放り出す気はないし、出て行かせるつもりもない。こういう話を君にするのは、君の『卒業』が近いからだ」

「そう……、なんで、今までそれを教えてくれなかったんだ!? その人はどうなった!？」

「焦らない。……大丈夫、悪い結末じゃないよ。それに」

ノリスは歴史の本を手にとってぱらぱらとページをめくる。目当てのページを見つけて、琢磨に差し出した。

「いいかい。ここから三ページ。ここに全部、書いてある。まだ君の知らない言葉とかも出てくるけど、これは君が自分で読んで知るべきことだ。僕は手伝いはするけれど、面倒を全部見るわけじゃない」

ふつと琢磨は笑う。イタズラを許すような目で先生を見て、ひとこと、

「意地悪いし、厳しいし。最低な先生っすよ」

歴史（後書き）

気付いた方がいるかどうかは分かりませんが、この話は『のっぴき
ならない事情によりて』の世界の話です。サイドストーリーという
わけではありませんが。

ご意見など、教えていただければ嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8110a/>

異邦民の手記

2010年10月20日18時03分発行